



展示紹介

広重の狂歌入東海道	P 1
広重と狂歌	P 2
浮世絵こぼれ話23～マイナーなジャンルだった？ 名所絵～	P 3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑱ 学芸員のお仕事紹介 講演会/ 浮世場なれ/編集後記	P 4

広重の狂歌入東海道

会期

2026年3月6日（金）～5月6日（水・休）



歌川広重「東海道五拾三次 石薬師 問屋場ノ図」（狂歌入東海道） 歌川広重「東海道五拾三次 京 三条大橋ノ図」（狂歌入東海道）

名所絵に新風をもたらした歌川広重は、江戸時代後期を代表する浮世絵師です。寛政9年（1797）、江戸八代州河岸（現在の八重洲周辺）で幕府の役人として消火活動などを行った定火消同心の安藤源右衛門の元に生まれました。そして、隠居した父の役職を13歳の時に引き継いだ広重は、15歳の頃には夢を追うべく浮世絵師の歌川豊広に入門します。こうして広重は、しばらく定火消を続けながら絵師修行を行いました。

広重が名所絵の名人として名を馳せるようになったのは、保永堂版「東海道五拾三次之内」（1833-35年頃）が出版されてからです。その後も人々の営みや自然をあらゆる角度から観察し、東海道の宿場を題材とした揃物を生涯で20種類以上描きました。その中でも、55人の狂歌師による狂歌と名所絵を巧みに融合させた、佐野屋喜兵衛版「東海道五拾三次」は、通称「狂歌入東海道」として親しまれています。本展では、全56点の「狂歌入東海道」を当館で初めて一挙に展示します。また、和歌の形式で機知と風刺を交え日常を詠んだ、江戸時代の狂歌にまつわる資料もご紹介します。絵を見るだけでなく、言葉からも想像することによって、当時の旅人の心持ちや宿場の風情を感じることができます。

広重と狂歌

狂歌とは、五七五七七の和歌の形式を用いて日常の出来事や世相、旅の情緒などを軽やかに詠んだ、江戸の庶民文化を象徴する文芸です。四方赤良（太田南畝）と朱楽管江が中心となって編纂した『万載狂歌集』（1783年）などがヒットし、特に天明年間（1781-89）において江戸を中心に大流行しました。町人や武士、俳人、絵師に至るまで、幅広い層が狂歌連と呼ばれるサロンのような団体に属し、互いに狂歌の贈答を行い、版本の出版を通じてそのネットワークを広げていきました。絵師が挿絵を担当する狂歌本も多く制作され、言葉と絵が響きあうメディアとして発展しました。

歌川広重も、活動初期から多くの狂歌師と交流し、自ら狂歌の創作にもいそしんでいたと伝えられています。通称「狂歌入東海道」は、広重の出世作となった保永堂版「東海道五拾三次之内」の刊行からおおよそ7年後に制作されました。東海道の始まり「日本橋」、終着地点と天皇の都の2場面の「京」を含めた56枚の東海道の宿場が、横中判錦絵に描かれています。絵に添えられているのは、55人の狂歌師がそれぞれの宿場の特色に合わせて詠んだ狂歌です。

では、「狂歌入東海道」はどのようにして、絵と言葉の二重奏を楽しませてくれているのでしょうか。ここからはシリーズのうち「日本橋」と「藤沢」の場面を例にその魅力を紹介します。

【図1】の日本橋の場面には、「日本橋 / たゞ一すぢに / 都まで / 近くて遠き / はるがすみかな」という、あのや幸久による狂歌が添えられています。春霞のせいで日本橋から京都まではまっすぐ続く道のように近く感じるけれど、実際は遠いと読むことができます。背景には富士山と江戸城、橋の上には、京の方面へ帰る大名行列の一行と棒手振り（鮮魚などを天秤棒で担いで売り歩く商人）が行き交う様子を描いています。忙しい日常の描写から、旅の始まりの様子が生き生きと伝わります。



【図1】歌川広重「東海道五拾三次 日本橋」（狂歌入東海道）



【図2】歌川広重「東海道五拾三次 藤沢」（狂歌入東海道）

【図2】の東海道6番目の宿場町である藤沢宿の場面では、松吟庵清風によって「うちかすむ / 色のゆかりの / ふぢ沢や / 雲井をさして / 登る春かな」と詠まれています。ほのかに霞んだ色合いに縁のある藤沢よ、春の到来とともに、霞は雲井（天あるいは天皇）まで立ちのぼっていくと読めます。「ふぢ沢」の掛詞としては、藤の花や富士山が考えられます。図中には左奥に大山、手前右側に大鋸橋、左側に江の島道へと続く一の鳥居が描かれています。俯瞰的な構図によって、霧がかかるのど

かな宿場町の様子を隅々まで見渡すことができます。

二つの場面を通して見えてくるのは、絵と狂歌が寄り添ってこそ表現できる、臨場感ある旅の情景です。言葉によって風景が彩られ、風景によって言葉が息づく相互作用によって「狂歌入東海道」は、他に類を見ない東海道を描いた揃物になっています。

浮世絵 23

～マイナーなジャンルだった？ 名所絵～



歌川広重「東海道五拾三次之内 藤沢 遊行寺」(保永堂版) でしょうか。

浮世絵の人気ジャンルといえば、「美人画」、「役者絵」、「名所絵（風景版画）」が挙げられます。人気歌舞伎役者を描いた「役者絵」、女性を題材にした「美人画」は、江戸時代初期から描かれ、当初から庶民の間で人気でした。一方、「名所絵」というと、世間に広まったのは江戸時代後期になってからといわれています。「名所絵」が浮世絵の人気ジャンルに仲間入りしたのは、どのような理由があったの

理由その1 幕府による出版規制

江戸幕府は度々検約令を出しています。代表的なものとして享保の改革、寛政の改革、天保の改革です。これらの改革は浮世絵にも影響を及ぼしました。特に寛政の改革（1787-93）以降は、下絵（版木に彫る前の下書きの絵）を検閲するようになり、次のものは浮世絵に描いてはいけない対象となりました。

- ① 徳川家に関するもの
- ② 社会の出来事を風刺、批判したもの
- ③ お金をかけたぜいたくなもの
- ④ 春画や枕絵、好色本など

このような理由から、幕府にとがめられないジャンルとして「名所絵」が広まったといわれます。

理由その2 庶民による旅ブーム

江戸時代後期には、庶民の間で物見遊山を兼ねた寺社参詣が流行します。特に人気の参詣地といえば「お伊勢参り」で有名な伊勢神宮でした。この「お伊勢参り」を題材に、主人公の弥次さん喜多さんが珍道中を繰り広げる十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は大ヒットしました。弥次さん喜多さんの目線で描かれた旅道中が当時の庶民に受けたことで旅への関心が高まり、「名所絵」が広まりました。

理由その3 北斎、広重の活躍

「名所絵」を人気ジャンルへと押し上げた一人に葛飾北斎が挙げられます。さまざまな絵師が名所絵を手掛けましたが、特に庶民に受け入れられたのが北斎の「富嶽三十六景」です。西洋画法を取り入れた大胆で奇抜な構図は、後に描かれた名所絵の代表的存在になる広重の大ヒット作「東海道五拾三次之内」（保永堂版）にも見られます。

幕府による出版規制、庶民による旅ブーム、北斎・広重の活躍などから、名所絵は美人画、役者絵に続く浮世絵の人気ジャンルへと変化していきました。



葛飾北斎「富嶽三十六景 相州江の島」



二代目オニカゲ学芸員のページ⑱

学芸員のお仕事紹介 講演会

みなさん、藤澤浮世絵館が主催する講演会や講座に参加したことはありますか？ より多くの人に作品のことを知ってもらうため、当館の学芸員は、展覧会を企画する以外にも、さまざまな業務を行っています。今回はそのうちの一つ、講演会のお仕事について紹介します。講演会を開催するためには、次の①～⑤のようなお仕事があります。

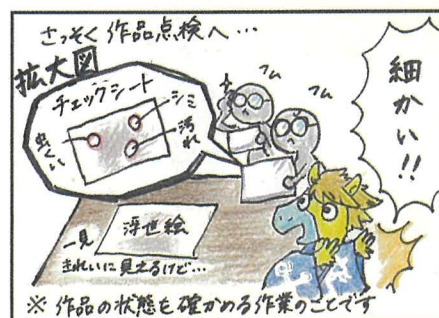
- ① 展覧会と関連するテーマを決めて、講師の先生に依頼
- ② 会場の確保・日程調整
- ③ 講師の先生との内容の打ち合わせ・データのやり取り
- ④ チラシやSNSでの周知、参加申込受付
- ⑤ 当日の会場設営や講師のご案内

そのほかにも、さまざまな準備を行って、一つの講演会を開催しています。無事に開催でき、参加者から「おもしろかった。」と言ってもらえると、オニカゲ学芸員はとても励みになります。また、講師の方々の講演は、オニカゲ学芸員にとっても大変勉強になっています。

令和7年度は、展覧会ごとに藤澤浮世絵館主催で4回、神奈川県立歴史博物館との連携講座を4回、全部で8回の講演会を開催しました。藤澤浮世絵館では、浮世絵や郷土史などに関する多種多様な講演会を行っています。気になる講演会がありましたら、ぜひご参加ください。



講演会「幕末の浮世絵―黒船と米相場―」



編集後記

「狂歌入東海道」は絵の中に空間があります。また意味を固定させず読み手に解釈の余地を残す狂歌が記されていることによって、鑑賞者の想像力を掻き立ててくれます。本展では、江戸時代に絵と言葉がどのような関係にあったのか展示作品を通して考察していただき、それが皆さまの日常の風景や言葉に新たな目を向けるきっかけになれば幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索

【公式Instagram】[fujisawa.ukiyoe](#)で検索

